

エフェソ教会の長老たちに語られたパウロの演説

——使徒言行録 20, 17-35 の分析——

Paul's Speech to the Elders of the Ephesus' Community: Analyses of Ac 20, 17-35

Janusz KUCICKI

Abstract

本研究では、第三次宣教旅行で語られた演説、つまりミレトスでエフェソのキリスト教共同体の長老たちに向けてされた演説に着目する。この演説は、パウロがアジア州を去った後に共同体においてリーダーシップを取るべき人々に向けられた。この演説は多くの自叙伝的情報を含んでいるが、全ては、長老たちにパウロがしたのと同じ方法で義務を果たさせるために、聴衆にとっての教育的な模範として使われている。この演説はある特定の物語において機能を持つだけでなく、パウロの3回の宣教旅行に関する物語を通して「主題演説」のグループにおける結論的な演説でもあるので、全ての時代のキリスト教指導者に向けたパウロの規範的な教えとして扱うことができるだろう。

はじめに

エフェソ教会の長老たちに向けたパウロの演説は、ルカによる第三次宣教旅行に関する物語の中で唯一の、パウロの演説である。拙著“*The Function of the Speeches in the Acts of the Apostles*”では、この演説はパウロの第三次宣教旅行の中で特定の機能を持つが、それはまた、3回の宣教旅行を通して配置されている「主題演説 (topic speeches)」と呼ばれるグループの中でも特筆すべき機能を持っていると述べている。それぞれの宣教旅行の物語に一つずつ、パウロの物語において解釈的機能を持つ「主題演説」がある。このグループの最初の演説 (導入的機能を持つ) である、第一次宣教旅行でパウロによって語られたピシディア州のアンティオキアでのスピーチ (Ac 13, 16-47) は、ディアスポラのユダヤ人に対して、イエスを復活したメシア (キリスト) とするパウロの宣言の例である。このグループの二番目の演説 (革新的性質を持つ) である、第二次宣教旅行で異邦人の聴衆に向けてパウロがしたアレオパゴスでの演説 (Ac 17, 22-31) は、イエスを死から復活した全世界の裁判者とするパウロの宣言の例である。このグループの三番目の演説 (結論的性質を持つ) である、エフェソ教会の長老たちに向けたミレトスでの演説 (Ac 20, 18-35) は、パウロによって、第三次宣教旅行の間にエフェソのキリスト教共同体の指導者たちに向けて語られたものである。こ

れら全ての演説は、三種類の異なる聴衆、すなわちディアスポラのユダヤ人、異邦人、キリスト教徒（このグループはイエスをメシアとして信じる人々であり、ディアスポラのユダヤ人と異邦人の両方から成る）に向けたパウロの活動を網羅している。本研究では、第三次宣教旅行で語られた演説、つまりミレトスでエフェソのキリスト教共同体の長老たちに向けてされた演説に着目する。この演説は、パウロがアジア州を去った後に共同体においてリーダーシップを取るべき人々に向けられた。この演説は多くの自叙伝的情報を含んでいるが、全ては、長老たちにパウロがしたのと同じ方法で義務を果たさせるために、聴衆にとっての教育的な模範として使われている。この演説はある特定の物語において機能を持つだけでなく、パウロの3回の宣教旅行に関する物語を通して「主題演説」のグループにおける結論的な演説でもあるので、全ての時代のキリスト教指導者に向けたパウロの規範的な教えとして扱うことができるだろう。

1. テキスト

<p>¹⁸ ὡς δὲ παρεγένοντο πρὸς αὐτὸν εἶπεν αὐτοῖς· ὑμεῖς ἐπίστασθε, ἀπὸ πρώτης ἡμέρας ἀφ' ἧς ἐπέβην εἰς τὴν Ἀσίαν, πῶς μεθ' ὑμῶν τὸν πάντα χρόνον ἐγενόμην,</p>	<p>20:18 長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。</p>
<p>¹⁹ δουλεύων τῷ κυρίῳ μετὰ πάσης ταπεινοφροσύνης καὶ δακρύων καὶ πειρασμῶν τῶν συμβάντων μοι ἐν ταῖς ἐπιβουλαῖς τῶν Ἰουδαίων,</p>	<p>20:19 すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。</p>
<p>²⁰ ὡς οὐδὲν ὑπεστειλάμην τῶν συμφερόντων τοῦ μὴ ἀναγγεῖλαι ὑμῖν καὶ διδάξαι ὑμᾶς δημοσίᾳ καὶ κατ' οἴκου,</p>	<p>20:20 役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。</p>
<p>²¹ διαμαρτυρούμενος Ἰουδαίοις τε καὶ Ἑλλησιν τὴν εἰς θεὸν μετάνοιαν καὶ πίστιν εἰς τὸν κύριον ἡμῶν Ἰησοῦν.</p>	<p>20:21 神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証ししてきたのです。</p>
<p>²² Καὶ νῦν ἰδοὺ δεδεμένος ἐγὼ τῷ πνεύματι πορεύομαι εἰς Ἱερουσαλὴμ τὰ ἐν αὐτῇ συναντήσοντά μοι μὴ εἰδώς,</p>	<p>20:22 そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。</p>
<p>²³ πλὴν ὅτι τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον κατὰ πόλιν διαμαρτύρεται μοι λέγον ὅτι δεσμῶ καὶ θλίψεως με μένουσιν.</p>	<p>20:23 ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどこの町でもはっきり告げてくださっています。</p>
<p>²⁴ ἀλλ' οὐδενὸς λόγου ποιῶμαι τὴν ψυχὴν τιμίαν ἐμαυτῷ ὡς τελειῶσαι τὸν δρόμον μου καὶ τὴν διακονίαν ἣν ἔλαβον παρὰ τοῦ κυρίου Ἰησοῦ, διαμαρτύρασθαι τὸ εὐαγγέλιον τῆς χάριτος τοῦ θεοῦ.</p>	<p>20:24 しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。</p>
<p>²⁵ Καὶ νῦν ἰδοὺ ἐγὼ οἶδα ὅτι οὐκέτι ὄψεσθε τὸ πρόσωπόν μου ὑμεῖς πάντες ἐν οἷς διήλθον κηρύσσων τὴν βασιλείαν.</p>	<p>20:25 そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています。わたしは、あなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。</p>

<p>²⁶ διότι μαρτύρομαι ὑμῖν ἐν τῇ σήμερον ἡμέρᾳ ὅτι καθαρὸς εἰμι ἀπὸ τοῦ αἵματος πάντων·</p>	<p>20 : 26 だから、特に今日はっきり言います。だれの血についても、わたしには責任がありません。</p>
<p>²⁷ οὐ γὰρ ὑπεστειλάμην τοῦ μὴ ἀναγγεῖλαι πᾶσαν τὴν βουλήν τοῦ θεοῦ ὑμῖν.</p>	<p>20 : 27 わたしは、神の御計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えたからです。</p>
<p>²⁸ προσέχετε ἑαυτοῖς καὶ παντὶ τῷ ποιμνίῳ, ἐν ᾧ ὑμᾶς τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον ἔθετο ἐπισκόπους ποιμαίνειν τὴν ἐκκλησίαν τοῦ θεοῦ, ἣν περιποιήσατο διὰ τοῦ αἵματος τοῦ ἰδίου.</p>	<p>20 : 28 どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなされた神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なされたのです。</p>
<p>²⁹ ἐγὼ οἶδα ὅτι εἰσελεύσονται μετὰ τὴν ἄφιξίν μου λύκοι βαρεῖς εἰς ὑμᾶς μὴ φειδόμενοι τοῦ ποιμνίου,</p>	<p>20 : 29 わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています。</p>
<p>³⁰ καὶ ἐξ ὑμῶν αὐτῶν ἀναστήσονται ἄνδρες λαλοῦντες διεστραμμένα τοῦ ἀποσπᾶν τοὺς μαθητὰς ὅπισω αὐτῶν.</p>	<p>20 : 30 また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。</p>
<p>³¹ διὸ γρηγορεῖτε μνημονεύοντες ὅτι τριετίαν νύκτα καὶ ἡμέραν οὐκ ἐπαυσάμην μετὰ δακρῦων νουθητῶν ἕνα ἕκαστον.</p>	<p>20 : 31 だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。</p>
<p>³² Καὶ τὰ νῦν παρατίθεμαι ὑμᾶς τῷ θεῷ καὶ τῷ λόγῳ τῆς χάριτος αὐτοῦ, τῷ δυναμένῳ οἰκοδομησαὶ καὶ δοῦναι τὴν κληρονομίαν ἐν τοῖς ἡγιασμένοις πᾶσιν.</p>	<p>20 : 32 そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。</p>
<p>³³ ἀργυρίου ἢ χρυσίου ἢ ἱματισμοῦ οὐδενὸς ἐπεθύμησα·</p>	<p>20 : 33 わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。</p>
<p>³⁴ αὐτοὶ γινώσκετε ὅτι ταῖς χρεῖαις μου καὶ τοῖς οὄσιν μετ' ἐμοῦ ὑπῆρέτησαν αἱ χεῖρες αὐταί.</p>	<p>20 : 34 ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。</p>
<p>³⁵ πάντα ὑπέδειξα ὑμῖν ὅτι οὕτως κοπιῶντας δεῖ ἀντιλαμβάνεσθαι τῶν ἀσθενούντων, μνημονεῖν τε τῶν λόγων τοῦ κυρίου Ἰησοῦ ὅτι αὐτὸς εἶπεν· μακρίον ἐστὶν μᾶλλον διδοῦναι ἢ λαμβάνειν.</p>	<p>20 : 35 あなたがたもこのように働いて弱者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。』</p>

2. テキストの分析

第三次宣教旅行での、アジア州におけるパウロの宣教活動に関する物語の最後の部分は、パウロのミレトス訪問の話であり、この町は宣教旅行全体を通して唯一、ルカがパウロの演説だけを記した場所である。この物語は、パウロが一人で歩いたトロアスからアソスまでの約 50 キロに及ぶ道のりを明らかにする旅行記で始まる。アソスは彼が同じ道りを船で渡った同行者と落ち合った場所である (Ac 20, 13)¹⁾。アソスからミレトスまでは一緒に旅をし (v. 14)、エルサレムへと急ぐため、

1) ルカはパウロの決定を説明する手間を省いた。この問題についての極めて推論的な説明については、Keener, G.S. Keener, *Acts. An Exegetical Commentary*, Vol. 3, pp. 2980–2983 の、学説のリストを参照されたい。パウロはまだ彼

エフェソは訪問することなく通り過ぎた (v. 16)。そのルカが述べた理由はある学者たちにとっては納得の行くものではなく、彼らは、ミレトスでエフェソから来た長老たちと会うことは、この面会のためにエフェソに立ち寄るよりも時間を要するのではないかと議論している²⁾。しかし、ローマへの船旅に関するルカの物語 (Ac 27) のことを考慮に入れると、エーゲ海の全ての港で船を探し、この短い期間で希望する目的地へと向かうことは簡単ではないと想像できる³⁾。さらに、Ac 20, 38 の記述は、いくつかの手配がされていたことを示唆している⁴⁾。

この面会に関する物語の二番目の部分 (Ac 20, 17-38) で、主要な話題はエフェソ教会の長老たちへのパウロの演説である (Ac 20, 18-35)。ミレトスに到着した後、パウロがエフェソ教会の長老たちにミレトスで面会するために呼び寄せるべく使者を送ったことをルカは知らせている (Ac 20, 17)。この情報は、これがしっかり予定された面会ではなく、むしろパウロの思い付きの行動であることを示唆している。この面会の意義は、読者がこの演説の内容から学ぶことである。この演説は、ルカによる第三次宣教旅行の記述 (Ac 18, 23-21, 16) の最後に配置されている。それはパウロのエルサレムへ向かう旅 (Ac 20, 1-21, 16) に関する小節の中心部分として配置され、パウロのマケドニア訪問の記述 (Ac 20, 1-16) から続くものであり、エルサレムへの航海 (Ac 21, 1-16) に関する物語へとつながる。演説自体は修辭的な形式を取っているが、その構成は形式的な修辭的要素に基づくものというよりはむしろ、内容に基づいて単純に決められたようである⁵⁾。一見すると、こ

の命に関わる潜在的な策略を恐れていたのだろうか？

2) H. Conzelmann, *Acts of the Apostles*, p. 171.

3) ミレトスの港は、その地理的な位置のため、エフェソの港に比べ、より船を見つけやすそうな港であり、アカイアからの船にとってより魅力的であった。ルカが本当の理由 (パウロがもう二度と安全にエフェソに入ることができなかつたであろうこと) を知っていたという仮説は、極めて推論的である。デメトリオの騒動が、パウロがエフェソを離れたことの原因ではなく、その騒動はその地方の権力者たちによって解決されたということがまさに示されており、そのことはいまだにパウロに対抗する勢力の存在を疑う根拠とはならない。Ac 21, 27 a と Ac 24, 18-19 はアジア州から来たユダヤ人に関係しており、ルカは直接的にエフェソでの騒動として述べておらず、異邦人の間の出来事として提示した。

4) Kurz は、パウロがマケドニアとアジアで過ぎ越しの宴会とペンテコステの宴会の間 (50 日間) の多くの時間を過ごしたことを正しく指摘した。W.S. Kurz, *Acts of the Apostles*, p. 307. Ac 20, 6 は、パウロがフィリビからトロアスに到着する前に 12 日間が過ぎていたことを示している。Ac 20, 7 はトロアスでパウロが二日間過ごしたことを示している。Ac 20, 13 から、パウロがトロアスとアソスの間を歩き、約二日間かかったことがわかる。Ac 20, 15 で、アソスからミレトスまでの航海に 3 日間かかったことがわかる。パウロはミレトスに到着するまでに、50 日のうち 19 日を費やした。エフェソでは、パウロは少なくとも 4 日間過ごしている (Ac 20, 17)。カイサリアへの航海の間、休憩だけのためにパウロは少なくとも 9 日間は費やしている (パタラで 1 日 Ac 21, 2, ティルスに 7 日間 Ac 21, 4, プトレマイスに 1 日 Ac 21, 7)。全て合わせると、パウロは旅の休憩のためだけに 50 日中 28 日を費やしており、それによってもはやミレトスからエルサレムまでの距離を 3 週間で行かなければならなくなった。それはルカが「急いだ」という言葉を使った根拠となる。

5) Dibelius はこの演説を一種の「贅辭」であると考えている (*Studies in the Acts of the Apostles*, pp. 155-158)。Watson はこの演説を修辭表現のために設計された文体の一例と捉えている。D.F. Watson, "Paul's Speech to the Ephesian Elders (Ac 20, 17-38Z: Epideictic Rhetoric of Farewell," in *Persuasive Artistry: Studies in Honor of George A. Kennedy*, ed. D.F. Watson, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1991, pp. 184-208. Witherington III はこの演説を熟慮された修辭であると考え (The Acts of the Apostles, pp. 613-614)。

の演説は別れの挨拶のように見えるが、ルカはおそらく、第三次宣教旅行のみならずパウロの宣教旅行全体を通じた記述の結論を創作するためにこの種の演説のいくつかの要素を意図的に使っているのである⁶⁾。この中の大部分の節（18節中10節）がパウロ自身に関するものであり（Ac 20, 18-21, 33-35）、このことは、ルカがパウロの重要な性質を提示しようとしている印である⁷⁾。パウロに関する物語は三つのグループに分類される。一つ目はパウロのエフェソでの宣教で（Ac 20, 18-21）、二つ目はパウロのエルサレムへの帰還計画を示しており（Ac 20, 22-24）、三つ目のグループはパウロの宣教活動の経済面に関することである（Ac 20, 33-35）⁸⁾。

この演説は、彼の最終的な気持ちを聞かせるために、エフェソ教会の長老たちだけを招いて、彼らに宛てて語られた（v. 17）。パウロは通常とは異なり、修辭的規則を無視して直接的にエフェソにおける自身の宣教活動の例から語り始めている（20, 18-21）⁹⁾。18節では、ルカは演説の内容と主題についての一般的な考えを示す冒頭の声明の形で、アジア州にいる間のパウロの生活について、エフェソの長老たちの共通認識に関するパウロの信念を示した¹⁰⁾。この演説においては、パウロ自身が、方向性を示し参考にするべき点を与える模範的な手本なのである。パウロがアジア州に長期滞在している間の継続的で不変の行為は、よく知られた事実としてすぐ次の節で概観されている。19節では、ユダヤ人による彼への陰謀が引き起こした、その地域における宣教の苦難が明示されており、それは第三次宣教旅行に関するルカの物語の中でここまでの間に明かされていなかった新情報である¹¹⁾。この反対派がパウロの涙の原因であり、彼にとって常に降りかかる試練の時であった（v. 19）。この情報は、この状態に時折なるのではなくむしろこれが永続的な状態であることを示唆し、宣教の苦難を表わしている¹²⁾。このような状況にもかかわらず、パウロは謙虚に主に仕えた¹³⁾。この節の意味は、パウロが個人的な犠牲を払ってまでも忠実に主に仕えたということである¹⁴⁾。このような好ましくない状況にあっても（v. 20）、パウロは長老たち（特定の人）やエフェソ教会の信者

6) この陳述については後程演説の機能を考察する際に説明する。

7) Kurichianilはこの演説を旧約聖書の演説（Josh 23, 2-16, 1 Sam 12, 1-25, 1 Kings 2, 1-9）と比較している。J. Kurichianil, "The Speeches in the Acts and The Old Testament," *InThSt* 17 (2/1980), pp.181-186.

8) エフェソの共同体に関する部分（Ac 20, 25-32）はさらに三つに分けられる。一つ目はエフェソの教会に対する長老たちの責任についての教えであり（Ac 20, 25-28）、二つ目は教会が直面するかもしれない危険を示すもので（Ac 20, 29-31）、三つ目はエフェソの長老たちに向けた激励の言葉である（Ac 20, 31-32）。

9) Keener, *Acts*, vol. 3, p. 3005.

10) 同様の表現がThess 1, 5にも見られる。

11) この情報は、エフェソにいるパウロに対するユダヤ人の反対派について言及されているAc 20, 19からの情報と関連しているかもしれないし、あるいはルカが記録していないアジア州の別の反対派と関連しているかもしれない。

12) 第三次宣教旅行のこの種の描写は、エフェソとアジア州におけるパウロの活動の物語には含まれていない。

13) パウロは簡潔に自分自身をイエスのしもべ、より正確には忠実なしもべとして表現している。彼の忠実さは ταπεινοφροσύνης και δακρύων και πειρασμών（謙遜、悲嘆、試練）という三つの表現によって強調されており、ここでは彼の尽力ゆえの苦難を示す一種の概説として提示されている。このような概説はパウロの手紙にも現れる（Rom 8, 35-39; 1 Cor 4, 11-13; 2 Cor 4, 8-13; 6, 3-10; 11, 23-28）。

14) ルカはパウロに対抗するユダヤ人の反対派についてAc 19, 9で触れているが、Ac 19, 21-40ではその言及がないので、「ユダヤ人の陰謀によって降りかかってきた」という句は特定の出来事というよりは一般的な意味を持つと捉えられ、必ずしもエフェソのユダヤ人だけではなく、（少なくとも）アジア州のユダヤ人も指している。Neil, *The Acts of the Apostles*, p. 213.

たち（一般の人）に対する義務を忘れることはなく、常に忠実に彼らの発展のために奉仕した¹⁵⁾。彼は福音の伝道（ケリユグマ）を宣言し、福音の正しい解釈を教えることで、公衆の面前でも個々にでも彼らを高めた¹⁶⁾。ここでの宣言と教えの陳述は、パウロの宣教活動に対する全体論的なアプローチを表わそうとするものであり、福音を最初に広めることだけではなく、正しい理解に導く説明を含んでいる。彼の全ての活動は、ユダヤ人とギリシャ人を神に向けて悔い改めさせることと、主イエスを信じさせることに導くものであった（v. 21）。この声明は、パウロが主のしもべとして奉仕したことの目的を、アジア州の住人に示すというだけでなく、彼の活動の主たる目的を明らかにするものである¹⁷⁾。パウロの宣教態度において、ユダヤ人も異邦人も（一般的なアプローチとして）何ら違いがないのである（v. 21）¹⁸⁾。このように、ルカは vv. 20-21 でパウロの宣教の特色を概観した¹⁹⁾。

Ac 20, 18-21 の語りは、パウロの宣教態度を示す言明であり、一方で長老たちのための模範を提供しており（教育的側面）、もう一方でそれを基に演説全体を組み立てている（説話的側面）。なぜならこれに続く語り（Ac 20, 28-32）の大半は、比較をする形でパウロの態度に関する説明を表わす主題（Ac 20, 18-21）に言及しているからである。長老たちはパウロの教えと生活様式を知っており、それは彼の性格を統合した二つの首尾一貫した部分を形作っている。それゆえに、パウロは長老たちが従うべき模範を提示することができ、長老たちは彼ら自身をパウロが働いたのと同じ状況下におくことになる²⁰⁾。

パウロのアジア州における宣教の概要を提示した後、ルカはミレトスに長老たちを呼んだ理由を示すことから始めている。演説の冒頭でルカによるパウロはエフェソとアジアでの過去の宣教について説明しているが（Ac 20, 18-21）、今はこれからエルサレムを訪れるという気持ちを明かした（Ac 20, 22-24）。使徒言行録の読者はすでにパウロの計画を知らされているが（Ac 20, 3.16）、エフェソ教会の長老たちもまた彼の決心を知っていると仮定することは可能である。しかしながら、彼らはまだ（25節まで）これがパウロと会える最後の時であることを知らなかった。演説のこの部分は、パウロが決心した理由を提示することから始まっているが、それは聖霊の力によるものであることを示し、次のように述べている。 *vñv idou dedeuménoç egw tñ pneúmati*（そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます）²¹⁾。この発言は、この決定が彼の個人的な信念によるものである

15) Watson はこれを、自分の義務を忘れるという潜在的な罪へのパウロの回答であると見ている。D.F. Watson, “Paul’s Speech to the Ephesian Elders, p. 197. この見方は可能ではあるが、パウロの演説の肯定的な文脈は、むしろ不完全なところのないパウロの宣教に対する態度を前向きに示していることを示唆している。

16) エフェソでの最初の声明は、パウロの率直で大胆な演説であったらう。この節での場所の表示は、パウロのエフェソでの宣教活動がユダヤ教会とティラノの講堂に限られていなかったという事実を示している（Ac 19, 8-9）。

17) Fitzmyer, *The Acts of the Apostles*, p. 677.

18) この情報は、パウロの宣教がユダヤ人と異邦人に向けられていたことを示しており、それはパウロの宣教様式（初めにユダヤ人、次に異邦人）に従っている。

19) Johnson, *The Acts of the Apostles*, p. 361.

20) この演説に関して、Dodd は Ac 20, 18-35 は「パウロの書簡に書かれている言葉の模倣を多く含んでいるので、著者はこれらの書簡を利用したと仮定しなければならない」（*The Apostolic Preaching*, pp. 18-19）という意見を示している。

21) パウロの宣教活動の原動力としての聖霊は、パウロの演説の仕方に関するルカのアプローチにおいて中心的な主題である。Cf. Ac 9, 17; 13, 2.4.9; 16, 6-7.18.

ということを完全に否定するが、それはまた、彼が神の導きに対して従順であることを直接的に指摘している。エルサレム訪問に対するパウロの懸念は、その訪問の潜在的な危険性に気づいていることの現れであると同時に、それは間接的に、聖霊の意志に従いたいという熱望も表わしている²²⁾。ルカによるパウロはこの動機を次のように言うことでさらに発展させた。τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον κατὰ πόλιν διαμαρτύρεται μοι (聖霊がどこの町でもはっきり告げてくださっています)。これはパウロが聖霊の意志によって宣教活動に「本来的に含まれている」迫害の可能性ではなく、むしろどうい種類かの迫害を受けるかを懸念していることを直接的に示している (v. 23)²³⁾。直説法現在能動態の形「*await me* (わたしを待ち受ける)」を使うということは、これがパウロの宣教の経歴を通して過去も現在も未来も含めて迫害を受けた中で、パウロの反対派についての一般的な言及であることを暗に示している²⁴⁾。彼自身の経験と聖霊の証しにもかかわらず、パウロは聖霊に従い、神の計画の一部として予期された通りの監禁と抑圧を受けることを決め、自ら進んで遂行した (v. 24)。パウロはエルサレムを訪れることで払わなければならない犠牲の可能性、そしてまたそれが彼の人生をも巻き込むということに気づいていたようであったが、それでも彼は主イエスによって与えられた任務を果たすことにより注意を向けた (Ac 9, 15-16)²⁵⁾。24 節は、パウロが実現しなければならない特定の目的のための「道」としての彼の人生を理解していたことを示している。この「道」というのは彼にとって「特別な務めのために公式に委託されたこと」として理解される「任務」であった²⁶⁾。この任務は、彼が主、つまり彼の人生と行為の支配者として受け入れた、主イエスによって与えられたものである。この任務は「証しすること」と捉えられ、ここでは特に宣言することに限られる。この宣言とは、「神の恵の福音」に関してするものであり、このことは復活したメシアについてのケリュグマを意味する。パウロはディアスポラのユダヤ人と異邦人にこの「神の恵の福音」を宣べ伝えたが、エルサレムの住民にはしていない。この演説は、ディアスポラのユダヤ人と異邦人との間の宣教活動の最後に配置されているが、それはパウロが任務を達成したとみなしたことを意味しているのではなく、むしろ彼はエルサレムのユダヤ人にもケリュグマを宣言した時にのみ任

22) この言明はもうひとつの出来事を指している。それは物語のこの段階ではまだ明確にされていないが、パウロは(経験から)迫害を予期していた。ここにイエスの受難に関する予言との類似点を見る学者もいる。*The Acts of the Apostles*, p. 361; Keener, *Acts*, vol. 3, p. 3015. しかし、パウロはエルサレムで処刑されておらず、さらに言えばルカはパウロの死について読者に何も知らせていないので、そのような類似性を持たせた可能性は低いだろう。我々の見解では、この言明は、エルサレムでイエスやその弟子たちが拒絶されたのと同様にパウロも拒絶されたことを指していると考えられる。

23) ルカによるパウロはエルサレムで予期される「投獄」と「苦難」について語っているが、詳述はしていない。ルカは彼の語りの方策として、エルサレムにおけるパウロの投獄に関する物語 (Ac 21, 27-23, 11) と同様に、予言という修辞的技巧を用いてパウロの懸念を正当化するが (Ac 21, 4.11-14)、これは「投獄」と「苦難」についてより詳細な情報を与えている。

24) この解釈は、命令するもの (v. 22) と証しするもの (v. 23) が同じ力 (聖霊) であることによって支えられる。Witherington III, *The Acts of the Apostles*, 620. パウロの手紙の「監禁」という用語の使用に関しては Phil 1, 7.13-14.17, Phlm 13 を参照のこと。「苦難」に関しては 2 Cor 1, 4; 2, 4; 4, 17; 6, 4; Phil 1, 17; 1 Thess 3, 7 を参照のこと。

25) この宣言はパウロの手紙にも現れる: Rom 5, 15; 1 Cor 1, 17; 3, 13; 9, 24-27; 2 Cor 5, 18; Gal 1, 12; 1 Thess 2, 9; Phil 2, 16。

26) E. J. Schnabel, *Exegetical Commentary on the New Testament. Acts*, p. 842.

務を達成できると確信している²⁷⁾。

ルカは、パウロの第三次宣教旅行中の宣教活動に対する評価 (Ac 20, 18-21) とパウロの主イエスのしもべとしての自己理解 (Ac 20, 22-24) を含む必要な下地を作り上げた後、エフェソ教会の長老たちに直接的に関わるパウロの教えに取り掛かった (Ac 20, 25-32)。ミレトスに長老たちを呼び、彼らの共同体への奉仕に関する教えを施した理由は、エフェソからの最終的な出発に関する公式な声明として語られ (v. 25)、このことはパウロがもう二度と長老たちに会うことがないことを意味している²⁸⁾。長い時間をかけてパウロによって施された教育は、もう二度と得ることはできないが、それはエフェソ教会の現実が変化した新しい状況なのである²⁹⁾。パウロはもう共同体に何も与えることができないので、長老たちは自ら信者たちに対して責任を持たなければならない (v. 26)。この声明は、パウロから長老たちへの共同体に対する責任の切り替えである。それはエフェソに滞在している間、パウロが責任を持って (あるいは少なくとも責任を感じて) 宣べ伝え、説き、教えてきたことを意味している。彼はこれまで共同体に対して責任を持つ覚悟があったが、ここから先はそれを拒否する。しかし、それはパウロが長老たちに準備不足の状態で不意をついて責任を押し付けるということではない。なぜなら彼は、神の救済計画、つまりメシアであるイエスの名における救済について制限することなく教えることで (v. 27)、長老たちに準備をさせていたからである³⁰⁾。28節から、ルカによるパウロは共同体のリーダーシップに関するいくつかの特定の問題へと矛先を転じる³¹⁾。その中で初めのもは永続的な発展の必要性に関するもので、それは長老たちと共同体全体に関わる。この課題は、共同体の統一を注視し、真の教えを守る「監督者」になるべく聖霊によって定められた長老たちにとって、最も重要な義務である。「ἐπίσκοπος (監督者)」という用語は、使徒後 (post-apostolic) の時代の階層的意味というよりはむしろ、ここではヘレニズム的意味を帯び、様々な社会的、政治的役職を指し、そこには教育者の役職も含まれる³²⁾。ルカによるパウロの理解では、宣言と教えとしての教育 (Ac 20, 20. 27) は、彼の主要な関心事であり、それゆえに彼はこの課題の重要性を明らかにするために「気を配ってください」と命令法を使った。パウロがユダヤ人と異邦人にケリュゲマを宣べ伝えるために主によって選ばれたように、同じ方法

27) Ac 9, 15 で、イスラエルの民が最後に言及されていることに注意を払う必要がある。Ac 22, 17-22 もこの見解に従って読めば新しい意味を帯びる。パウロは彼の任務をディアスポラのユダヤ人から始め、成功裏に異邦人へと進めたが、まだエルサレムのユダヤ人への宣教には取り掛かっていなかった。ルカは、サウロの回心の後に彼が使徒たちと合流し、短い期間だが同志として働き、一人ではなかったことを詳細に記述している。しかしながら、ルカはまた、パウロがエルサレムでの福音をディアスポラのユダヤ人に独立して宣べ伝えたことを暗示している (Ac 9, 28-29)。

28) ルカによるパウロは将来の働きに対してローマの信徒への手紙を書いている時とは思想が異なっているように見える (Rom 15, 24-28)。

29) 18節で、パウロはエフェソの信者たちと共に過ごした自身の生活に注目させ、25節で、今、神の国を宣言していることに注目させており、それが共同体とその一員としての生活様式に関する教えであることを知らせている。

30) この声明は20節に含まれる声明のバリエーションである。Conzelmann, *Acts of the Apostles*, p. 174.

31) 28節は学者によって様々に解釈される多くの重要な声明を含んでいる。Conzelmannによれば、「使徒後の時代のための訓戒を提供している“offers paraenesis for the postapostolic age”」(*Acts of the Apostles*, 174-175)。しかし、Johnsonは28節を使徒の時代内の解釈と位置付けている (*The Acts of the Apostles*, pp. 362-363)。

32) ルカによるパウロがこの言葉を用いた文脈では、階層的な力の行使ではなく、正しい福音の伝道を宣べ伝え、擁護することを指している (Ac 20, 26-27)。

で長老たちは「神の教会」の羊飼いになるべく聖霊によって選ばれた。この表現は、同時代のギリシャでの一般的な羊飼いのイメージというよりはむしろ、ユダヤ人の伝統（神が羊飼いでイスラエルの民が神の羊の群れ）に近い意味で、共同体に対する義務を表わしている³³⁾。この言明は共同体内における長老の機能と関連しており、彼らの管理上の地位を示している。彼らは神に属する共同体について責任を負っている。なぜなら神は忠実なしもべであるイエスの血によってそれを得たからである³⁴⁾。この通常とは異なる句は、長老たちが面倒を見なければならないエフェソの（特定の）共同体が神自身に属するものであることを強調しており、このことが彼らの義務に決定的な重要性を与えたのである³⁵⁾。28節のパウロの発言は、単なる助言ではなく、短いが非常に先進的な、キリスト教の共同体（教会）の本質に関わる聖職者の教えであり、このことから長老たちの特権と義務が生じることになる³⁶⁾。しかし次に続く節（vv. 29-31）の文脈では、これらの言葉は長老たちに対する、彼らが直面するであろういくつかの困難の可能性に関する隠れた警鐘の類としてさらに理解を深められるだろう。28節の「あなたがた自身と群れに気を配ってください」という命令に、29・30節でより詳細な情報が与えられる。29節は、共同体全体を監視する長老の義務に関する「あなたがた自身と群れに気を配ってください」という表現の意味を示している。なぜなら、彼らは共同体を破壊しようとする外部からの偽りの預言者による攻撃的なプロパガンダを明示されているからである（v. 29）³⁷⁾。これはパウロがアジア州を去る時を指す言葉である「パウロの ἀφιζεις（出発）」の後に起こることであり、このことはその問題がすぐそこに迫っていることを示唆しているか（特定の文脈で）、あるいはその攻撃は将来いつかはわからないが、確実に来るということを暗示する（聖職者としての文脈）ということ、パウロの死の婉曲表現として理解される³⁸⁾。30節はその問題が共同体内部から生じるといふ、もう一つの危険性を提示している。長老たちは「あなたがた自身に気を配る」ことをしなければならない。この意味は、群れ全体を世話する「監督者」として聖霊に選ばれた人々の中から、信者を自分たちに従う者として引き抜くために共同体を分裂させようと、偽りの言葉を語り始める者が出てくるということである（v. 30）³⁹⁾。彼らの行動は計画的で、群れ全

33) Keener, *Acts*, vol. 3, pp. 3033-3040.

34) 「彼自身の血によって獲得した」という句の解釈の問題が関係している。cf. E. J. Schnabel, *Exegetical Commentary on the New Testament. Acts*, pp. 846-847.

35) The expressions “the church of God” with the soteriological addition, although here is placed in the particular context (Ephesus), takes a general meaning applied to the whole church. Neil, *The Acts of the Apostles*, p. 214.

36) その共同体は「彼自身の血によって獲得した共同体」と呼ばれるが、これはキリスト教の共同体を指す新約聖書の表現としては通常とは異なるものである。この代名詞「彼」は神を指しているのではなく、彼のしもべであるイエスを指している。長老たちはイエスの犠牲によって神に属することとなった共同体を守るために義務によって縛られているのである。

37) 「ἐγὼ οἶδα（わたしは知っている）」という言葉は、この問題に関するパウロの確信を暗示している。なぜなら、完了時制を使っていることが、エフェソではまだだが、（おそらく）どこかほかのところですでに起こっていることを示しているからである。Lightfoot, *The Acts of the Apostles*, 265. この「残忍な狼ども」という強烈な表現は、それが計画的で組織的なものであることを示唆している。

38) 二番目の解釈の方が多くの学者に指示されている。しかし Witherington III は、パウロがその地域から出発することを指すという解釈をしている。（*The Acts of the Apostles*, p. 624）.

39) Ac 20, 17 の「πρεσβυτέρους τῆς ἐκκλησίας 教会の長老」は、ここでは「ἐπισκόπους ποιμαίνειν τὴν ἐκκλησίαν（監督者（司教）、教会の羊飼い）」に変わっていることに注意されたい。Conzelmann はこれを、28節が使徒後の時代

体を守るのではなく、個人的な関心によって突き動かされるだろう⁴⁰⁾。30節で示された理由から、彼ら自身を監視するということが、29節で示された理由から、共同体のために監視するということが、その地域の教会の運命を委託された人々にとって基本的な義務である⁴¹⁾。外部から(v. 29)と内部から(v. 30)の危険は、ここでパウロによって、地方の共同体の運命に全面的な責任を負う「監督者」にとっての最大の仕事としてはっきりと示された⁴²⁾。この二つの驚異のために、長老たちは彼らの課題を達成するべく彼ら自身と群れを絶えず監視していなければならない(v. 31)。なぜなら、もし彼らの働きが悪ければ、結果的に共同体を存続の危機に陥れるかもしれないからである⁴³⁾。この後はむしろパウロの演説に含まれる聖別の考え方で(vv. 29-30)、パウロは彼らに永続的な警備(昼も夜も)を呼びかけている。パウロがエフェソに滞在した3年の間、夜と言わず昼と言わず彼らに教えることで彼らを見守り、世話してきたのと同じやり方で、彼らは彼ら自身を導かなければならない⁴⁴⁾。指導する課題は神学的問題とは関係なく、むしろパウロの苦悩(涙)の原因となった長老たちの適切であると言い難い態度によって引き起こされたに違いない。パウロのこれらの言葉は、エフェソの共同体に対する責任を長老たちに引き渡すという事実と結びついた彼の気づきを表わしている。それは簡単な仕事ではなく、皆が正しく備えることは難しいという理由からパウロはここまで彼が世話をしてきた人々を、神と恵みの言葉(ここでは福音を意味する)へと委ねた。長老たちはパウロがこの町にいる間に首尾よく彼と協力して共同体を作り上げたが、これからはエフェソで教会のアイデンティティと安定性を継続して構築していけるように、神と福音への奉仕に身を委ねなければならない⁴⁵⁾。神と福音(パウロによって宣べ伝えられた教え)に協力することによってしか、彼ら選ばれた理由である課題を達成することはできないだろう(v. 32)⁴⁶⁾。32節(神に長老たちを委ねること)はエフェソの共同体に対する責任を長老へと委譲するパウロの最終段階

の訓戒であることの暗示と捉えている。(Acts of the Apostles, p. 174). 「ἐπίσκοπος 見る」という言葉については H.W. Beyer, “ἐπίσκοπος,” in TDNT, vol. 2 (Grand Rapids: Eerdmans, 1973), pp. 608-622 を参照されたい。彼らを監督者としたのはパウロではなく聖霊であるということにも注意を払わなければならない。Witherington III, *The Acts of the Apostles*, p. 623.

40) これは、パウロの頭に教義上の組織ではなく、特定の個人が浮かんでいることを示している。Keener, *Acts*, vol. 3, 3045. その個人的な関心(v. 30)は長老たちが神の群れの羊飼いになるべきだという神の教会の思想(v. 28)と対照的である。ルカによるパウロは予言をしているのか、あるいはコリントの問題のことを指しているのか？

41) このテキストの原文上の問題については、B.M. Metzger, *The Text of the New Testament* (Oxford: Oxford University Press, 1979), pp. 234-236. を参照のこと。

42) S. Walton, *Leadership and Lifestyle. The Portrait of Paul in the Miletus Speech and 1 Thessalonians* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000), pp. 81-82.

43) パウロの終末論的訓戒(cf. 1 Thess 5, 6)の中でキーワードとなっている「γρηγορέω(見る, 起きている)」という言葉の使用は、vv. 29-31の文脈において内在的な終末の時に焦点を当てていることを示唆しているかもしれない。

44) この節でパウロ、は長老たちへの手本としての彼自身の態度を再度提示しており、長老たちはそれに従って行う感覚を思い出すはずである。パウロが絶えず注意し続けているという事実は、一方で改宗したエフェソ人にとってキリスト教徒の生活様式を学ぶことが困難であることを露呈しており、また一方では共同体に注意することに関する長老たちの義務の一つを指摘している。Bruce, *The Book of the Acts*, pp. 93-394.

45) Johnson, *The Acts of the Apostles*, p. 364; Neil, *The Acts of the Apostles*, p. 215.

46) 長老たちがイエスの忠実な信者に認められ、受け入れられることがこの状態である。

である⁴⁷⁾。

三番目の、演説の最後にあたる部分で (Ac 20, 33-35)、ルカはパウロの金品に関する自己発表を提示している。この自己発表は長老たちに金品に対する正しい行いを示すために語られ、それゆえに模範的な性質を帯びている。パウロの金品に関する正しい態度の顕示は、3つの側面から成る。一つ目の側面 (v. 33) は、彼の監督下にある信者たちの持ち物に刺激されたりそれを欲したりすることは決してないという、パウロの共同体に対する奉仕の正しい動機を表わしている⁴⁸⁾。その欲望は群れの物品を奪うということだけではなく、より起こり得ることとして、共同体への奉仕に対する報酬を要求することに繋がる。パウロは間接的に、長老たちに、彼が示した模範に従い、エフェソ教会への奉仕を物質的な目的をもってすることを避けるように呼びかけているのである。二つ目の側面は、生活するのに必要な収入を得る方法に関するものである (v. 34)。パウロは自身の必要と同時に、共に働く人々の必要を満たすためにも、アジア州で宣教をする間、自分の手を使って働くことで必要なお金を稼いでいた (v. 34)⁴⁹⁾。パウロは間接的に、彼ら自身 (そしておそらくは彼らの家族も) を支える必要な物を得るために働かなければならないこと、そして共同体から利益を得てはならないことを長老たちに教えた⁵⁰⁾。三つ目の側面は必要とする人への援助を指している⁵¹⁾。パウロは労働を経済的安定の源と見ており、初めは彼自身と彼とともに働く人々を支えるためにと提示をしたが、さらにそれだけではなく、自分の必要な物を確保することができない人々を助けるために使うことの可能性も示した (v. 35)⁵²⁾。パウロは長老たちもよく知っている彼自身の模範的行動を示したが、これはルカがエフェソでパウロの宣教について物語の中では提供していないもう一つの情報である。ルカによるパウロによれば、たとえ福音の伝承の中に記述が見つけれなくても、これはイエスの信者たちの中で共通した実践の形としてルカの伝承で証明されており、この態度はイエスの教えと一致している (Ac 4, 32-37)。そして間接的にパウロは長老たちに、必要としている人である共同体の人々を助けるために情熱を注ぐことを教えた⁵³⁾。パウロは事実上 Ac 20, 33-35 で間接的に、長老たちの社会的義務に焦点を当てている。彼らは見返りを期待することなく共同体に尽くさなければならず、彼らが必要とする物のためだけではなく、信者たちの日常の必要を満た

47) Keener, *Acts*, vol. 3, p. 3053.

48) Fitzmyer, *The Acts of the Apostles*, p. 681.

49) これはエフェソでの宣教に関するルカの物語で示されていなかった新しい情報である (第二次宣教旅行中のコリントにおける宣教の物語とは対照的である) 似たような言明については次の箇所を参照されたい。cf. 1 Cor 4, 12; 9, 15-18; 1 Thess 4, 11; 2 Thess 3, 6-10.

50) Keener, *Acts*, vol. 3, p. 3060.

51) パウロがエフェソ教会の長老たちに要求することは、徐々に拡大していることに注意すべきである。信者の物を使ってはいけないということから始まり、自身の手によってお金を稼がなければならぬということに進み、最後は自分のお金を必要としている人のために使うように指示している。

52) 「ἀσθενέω (弱い、力の無い)」という言葉がルカは、身体的な病気を指すものとして使っている (Lk 4, 40, 5, 5, 12, 27) が、パウロの手紙では、弱さと能力のないことを指す (1 Cor 4, 12; 2 Cor 12, 10; Gal 4, 11; 2 Tim 2, 6)。35節とイエスの発言との関係については次を参照のこと。R.F. O'Toole, "What Role Does Jesus' Saying in Acts 20, 35 Play in Paul's Address to the Ephesian Elders?," *Bib* 75 (1994): pp. 329-249.

53) 実はルカによるパウロがイエスの言葉として示した「受けるよりは与える方が幸いである」という言葉は福音の中に見当たらないが、Lk 12, 33には類似の表現が存在する。ここで使われた句は、ギリシャの格言である。H. Conzelmann, *Acts of the Apostles*, p. 171.

すために彼らの持ち物を共有する義務を負っている⁵⁴⁾。ルカはパウロを、これらの高いレベルの義務を果たし、彼によって成功裏に設立された共同体への責任を委ねた人々に、同じ行いを期待した人物として描いている。

結論

読者は事実上、ルカの物語そのものから直接というより、演説に含まれるエフェソでのパウロの業績からより多くのものを学ぶことができる。この部分は非常に体系的な概要になっている。第三次宣教旅行の物語で、ルカはこの演説をパウロの宣教師としての特徴を示す四つの側面を表わす場として選んだ。一つ目の側面は、(A) 彼の宣教態度に関するもので (Ac 20, 18-21)、与えられた課題への際限のない献身によって特徴づけられる。二つ目の側面は、(B) 彼が働く場所の状況についての気づきと、彼の奉仕に対する深い神学的解釈に関するものである (Ac 20, 22-24)。三つ目の側面は、(B¹) パウロとその宣教活動の成果、つまり共同体を引き継いでいこうとする人々との関係を表わしている (Ac 20, 25-30)。長老たちへの助言は、ルカによるパウロの、指導者たちの責任に対する認識を明らかにしている。四つ目の側面は、(A¹) 宣教活動の報酬に対するルカによるパウロの態度を表わしている (Ac 20, 31-35)。演説の構成 (A-B-B¹-A¹) は、初めの (A) と四番目の (A¹) が互いに関連しており、パウロの迫害の預言 (B) とエフェソの共同体の話 (B¹) はこの演説の主題として一つのまとまりになっている。このことは、宣教活動が世界に証拠を示す二つの方法から成ることを指している。一つは信者たちにとってよい証しと手本 (ケリュグマを宣べ伝えること (A) と貧しい者への永続的な援助 (A¹) とならなければならないという日々の生活に関するもの (A-A¹) であり、もう一つは信仰のために命を犠牲にすることへの準備 (B) と、真の信仰のために戦うこと (B¹) である。

54) Walton, *Leadership and Lifestyle*, p. 82-84.